

## 顧問・佐々木 哲さん を思う

同志社新聞局 OB 大西 建吉

同志社学生新聞は昭和21年9月1日発刊された。1面のトップ記事は「学業と生活の両立は困難」というテーマの座談会である。出席者は、田畑忍大学長、有賀鉄太郎教授、恒藤恭教授のほか学生数名である。場所は下鴨高木町の佐々木さんのお宅の座敷、(夏の暑い日であった。)司会は佐々木さん、先生方をお迎えして緊張した部屋のふんいきを独特の人なつっこい笑顔と口調で柔らげ進化した光景が臉に浮ぶ、49年前のことである。

平成4年3月、京都パレスサイドホテルで昭和28年以降卒業の局友が集った。その席上「同志社学生新聞局友会」の設立が提案され、準備期間を経て平成5年5月正式に発足した。佐々木さんは(富田隆三君らとともに)清友会(創業期の局友の会)代表としてゲスト(として平成4年の会合に)出席、それ以後、創刊50周年記念事業に深くかかわるようになった。

佐々木さんは航空部 OB 会の組織の確立、航空部50周年記念行事の推進に多大の貢献をされたと聞いている。新聞局の50周年記念事業については、この体験をふまえ、実行委員会においては積極的に発言、企画、推進についてきびしさを感じさせることもしばしばあった。

去年の夏、佐々木さんを含めた局友3人で1夕を過ごした。佐々木さんは(多木さんと)局友会だより第1号を見ながら、記念事業について語っていた。佐々木さんの言葉のはしばしに、記念事業について言うべきことは言いつくした、今後のことは局友の皆さんにお願いするという感じがうかがわれたことが妙に印象として残っている。

佐々木さんとの交わりは昭和16年4月、予科入学以来50数年に及ぶ、ふだんの会話は軽妙にしてしゃだつ、心を許した友であった。

## 追憶の想い

## 佐々木哲さんの思い出

橋本元雄

佐々木哲さんは、昭和16年4月大学予科入学、航空部に入部された。同年12月、本来であれば翌17年3月卒業である学生は昭和16年12月に繰上げ卒業式が挙行され、同時に航空部でも創部者である牧野伊兵衛、竹内、西田、中村(以上4氏はいずれも故人)村上、橋本等6人の送別会が実施されて私はその後、昭和17年2月現役兵として入営、陸軍自動車学校での教育の後、見習士官となって、11月大阪に帰って来た際、休日に大阪第2飛行場(現在の伊丹空港)を訪れました。当時はターミナルビルも無く、北摂の山並みをはっきりと見えていました。翌昭和18年2月、私は中支那野戦自動車廠本廠(中国、上海)に転属になり、終戦の翌年、昭和21年4月に復員しましたが、その間、佐々木さんとはお会いする機会はありませんでした。昭和49年(1974年)食糧庁を退職した私は、株式会社大阪砂糖会館に勤務し、約10年経過したある日、三浦智介さんが尋ねて来られ創部50年の話があったこと等思い出されます。具体的な準備もなく、ただ最初は集まる程度の準備で、私の学生時代のアルバム等を持って行き、尾田さんと大阪砂糖会館の2階の会議室に会合準備をしたことが思い出されます。昭和59年3月4日(日曜日)第1回の会合を開催したのが同志社航空部50周年準備委員会の始まりでした。2~3回会合の後、佐々木さんが議事録をとり纏めて呉れるようになり、議事録や記録、提出書類の作成は記念事業開催される前まで、ワープロで作成したことを思い出します。

温厚な人柄と、計画的な業務遂行、円滑な運営には、周到な準備と、連絡、配意には敬服する処です。

同志社航空の活躍こそ、彼の霊に報いるのの一つかと思えます。謹んでご冥福をお祈りします。

## 「マルゴツ」の哲ちゃん

友 廣 勝

佐々木の哲ちゃんは下志津飛行学校の時代に「マルゴツ」と云う別名がありました。それは丸々として居てクリットして居る青年であり我々仲間内では「カタブツ」で「ゴツゴツ」しておりましたのでこの愛称がついたものであります。

同志社大では私の方が1年先輩なのですが、昭和18年の学徒動員令で各地から一緒に招集され兵役について居りましたが、そこから立川の第8航空研究所で体格検査を受けて下志津(千葉県)の飛行学校にて一緒になり何だお前もかと言う事で同年兵となった次第です。

この同年兵のグループはすべて学連の出身者でありましたのでお互いの程度がわかり和気あいあいですごして居りましたのでお前らは大学と云う学校に行つて女の子と喫茶店ばかり行つて居つただろう、だから軍人精神の何たるかがわからんのだと陸軍士官学校上りの新米少尉に云われました。

この20名が陸軍の特設空母に乗れて離着艦を経験したのは10名でありこの中に佐々木君も私も入つて居りました。最初はこの秋津洲丸(10,500総トン、114米の甲板)を瀬戸内海に浮べ、我々は加古川の飛行場から3式連絡機(キ76)で飛び出して今で云うタッチ・アンド・ゴウを訓練したものです。

それからは太平洋は米国の艦載機が飛んで来るので日本海に廻し能登半島の沖で本格的な離着艦訓練をして小樽港に行き、この後又日本海を廻つて下関から宇品に帰つて参りました。この様に生死の境を共にした友でしたので友情が厚くなるのは必然でしたが当時23歳から25歳の若者でありましたので珍しい事は何でも試してみようと云う好奇心の方が頭にあつた様に思つて居ります。

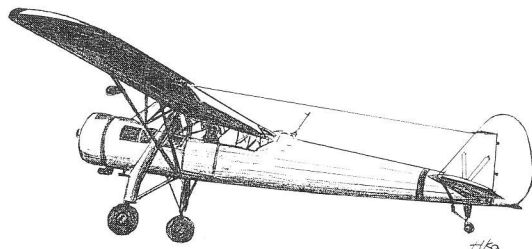
この様な年月の間にマルゴツの佐々木もタワシ

(ヒゲガコイ)の私も人間形成の上で次第にやわらかくなり、戦後の困難に対処出来たものと考えます。

こんな思い出を俺に書かすなんて全く!! 哲の野郎、早く生き返つて来やがれ!! 俺はいつでもお前のウィットのきいたジョークを聞いてやるぜ!!

全くもったいない友であり同年兵を失つた想いで一杯です。

(昭和19年卒)



日本国際3式指揮連絡機(キ-76)

(イラスト・加藤 寛)

諸元 全幅15,00m 全高3,30m 空虚重量886kg  
全備重量1,406kg 発動機空冷星型9気筒  
310HP

性能 最大速度220km/hr 実用上昇限度5,630m  
航続距離420km

# 追憶 佐々木 哲君

河 合 達 也

佐々木哲君が逝去されたと聞き突然のことに驚いた。心よりご冥福をお祈り申し上げます。同志社航空部のためにも惜しい人を亡くしたものです。大変残念です。

翔友会のために献身的努力を惜しまなかった彼の功績は賞賛に価するものと思われまます。佐々木君は昭和18年10月1日学徒出陣の2ヶ月後12月1日に学徒出陣の形で八日市98軽の部隊へ入隊航空整備部へ一旦配属、その後学生航空連盟出身者約20名が各地から集められ下志津の飛行学校へ入隊。キ76三式連絡機(フィゼラーシュトック)短距離離着陸機の飛行訓練、4月に卒業。半数は教官要員として下志津に残り、半数は空母要員として転属した。佐々木君は前者で銚子・新潟・米子等に於いて教官として活躍されたと聞く。特操の1期でも2期でもなくその中間で佐々木君の仲間達は特操の1.5期と称している。

彼との出会いは昭和16年4月大学予科に入った時分から丁度半世紀前航空部に入部した時でした。

当時の飛行練習は各大学の航空部の連中が伊丹の飛行場に集って初級者は95式三型(初練)で、上級者は95式一型(中練)で行われていた。各大学の航空部のうち同志社は部員が一番多かった。飛行機は軍の払下げか国から支給されたのか我々は何であれ飛べればそれで良かった。飛ぶことが楽しかった。

一日の訓練が終るとガソリンとカストルオイルの補給、胴体や翼の下部はオイルの汚れて真っ黒、ガソリンを浸した布で拭きとる。台車に尾そりを乗せて格納庫に1機つつ慎重に隙間を極力つめて格納し一日が終ると螢ヶ池から十三で乗換え四条大宮まで佐々木君の面白い話を聞いたりワイワイ、ガヤガヤだべりながら四条大宮まで帰りまし

た。

毎週金土の午後と日曜日は終日の訓練があり冬の日曜日などは家を出る時は夜の明けきらない真暗らの中を寒さをこらえて通ったのが強く記憶に残っています。

皆ただ飛行機に乗り度い一心で真面目に良く通ったものだと思う。

復員後学業の残りを終え夫々就職してからは仕事最優先の生活となり忙しく年賀状の交換程度で会う機会もなく過ごし停年を迎えリタイヤーしてからは時間的に余裕が出来、再び旧交を暖めることが出来たのは数年前頃から翔友会のゴルフ会にも佐々木君の熱心な誘いにより二度も参加し翔友会の皆さんと彦根 CC で一緒にプレイすることが出来ました。最初に彦根に行った時は角田<sup>スミタ</sup>さんが未だ元気な頃でゴルフの前日佐々木君と私を彦根市内・彦根城跡・鳥人間コンテストの毎年行われる場所・お寺など案内してもらい翌日ゴルフを楽しんで帰った。その後角田さんは逝去され二度目に翔友会ゴルフに行った時はやはりゴルフの前日佐々木君と角田未亡人を訪問し、角田さんのご仏前に香をたむけさせて頂きました。

これも佐々木君が角田さんの奥さんにあらかじめ連絡して手配をして呉れたお蔭で出来たことです。

この様にマメで面倒見の良い友人を失ったことは本当に残念です。

佐々木をしのび昔のことなど思いながら書きました。

(昭和21年卒)

# 彗星の如く

窪田昌三

家内が電話に出ると、開口一番「風呂に入ってまっか」と切り出すのが常だった佐々木さん、あなたからの電話は、もうかからない。昨年暮も追いつまった大晦日、2回目に訪ねた病室での別れ際、差し出された左手を握った時の、握り返す力も弱かったあなたの手の感触が、まだ私の左手に残っているのに……。

最初の出会いがどのようなだったかは、記憶していませんが、50周年が数年後に近づいてきた頃だったと思います。若いOBが何名か集まり、50周年の記念事業について相談を始めた頃、あなたはまるでその時を待って居たかのように彗星の如く私達の前に現れました。そして、それからのあなたは、まるで曳航機か、ウインチのように私達を力強く引っばってくれました。アッと云う間に50周年記念事業準備委員会を作り、組織を固め、目標を定め、甲論乙駁する意見を調整し、委員各人の尻をたたいて募金を集め、あたかも天命のように計画を推進されました。当時、口の悪い若手委員は、「会社の社長や、営業部長よりも、佐々木さんの方が恐い」と陰口をたたいたものです。そう云いつつもあなたの行動力と人柄に惚れて、一も二もなくついて行ったものでした。佐々木さん、あなたが居なかったら、あの盛大で心に残る50周年記念事業は実現しなかったでしょうし、今日の翔友会も存在し得なかったでしょう。

今から思えば、あなたが現れる前のOB会は誠に貧弱なものでした。確かに、熱心に応援し、援助を惜しまない方々は居られましたが、その数も少なく、名簿は不備で、団体としての組織力が脆弱なことは如何ともし難いことでした。あなたの四十九日も過ぎた頃、奥様のご依頼で、南村君と2人、あなたが残された資料、書類の整理に何

った時、あの短期間の間にOB名簿を100%完全なものにされた努力の跡を発見し、ただ頭の下る思いだけでした。それは、住所不明の方々を追跡して転居先から次の転居先へと、各地の市役所に照会された膨大な量の問合せとその回答の郵便物でした。実に根気の要る作業であったことでしょう。

ここ数年、あなたは入退院を繰り返しつつ、病と闘いながら、時には病院を抜け出してまで、種々会合に出席して下さり、今にして思えば、少し元気が無いなと感じたこともありましたが、さぞ辛かったことでしょう。

佐々木さん、あなたが作り上げた翔友会は強固な団結と、明確な意志を持つ組織として恐らく全国の航空部OB会の中でも右に出るものは無いと誇りに出来るものとなりました。しかし、これから私達は、あなたのアドバイス無しでやってゆかねばなりません。でも安心して下さい、これ迄はあなたの指導を受けていた若手OB達が率先して動いており、あなたが楽しみにしていた60周年の準備も進んでいます。あなたの遺志は確実に引き継ぎ、航空部と翔友会の発展のために頑張ります。そちらに行つてあなたに再会した時、『何をモタモタしてんねん、段取りが悪い!』とお叱りを受けないためにも……。

合掌

(昭和39年卒)

## もう一度会いたい

速見直喜

月なきみ空に きらめく光り  
ああその星影 希望のすがた  
人智は果なし 無窮の遠に  
いざ其の星影 きわめも行かん

平成7年1月6日、佐々木さんの訃報が届く。  
体中の力が抜けてしまった。

昨年11月、幹事会でお会いした時は、とてもお元気だったのに。あの日が最後の別れになるなんて、夢にも思ってみなかつた。創部60周年の仕事もまた、ごいっしょ出来ると、とても楽しみにしていたのに、もうお会いすることが出来ないと思うと、とても切なく悲しい。

佐々木さんに初めてお会いしたのは、昭和59年3月4日の第1回航空部創部50周年準備委員会の席でした。それは私の人生にとって、とても素晴らしい出会いでありました。あれから11年、楽しかった。佐々木さんの勇氣に魅せられやって来た翔友会活動、本当に楽しかった。

通夜の席、隣におられた西山先輩が、何度も涙を拭いておられた。

思いはきっと同じです。「もう一度、もう一度お会いしたかった。」

その夜は、明け方まで亡くなった父の夢を見ていました。

雲なきみ空に 横とう光り  
ああ洋々たる 銀河の流れ  
仰ぎて眺むる 万里のあなた  
いざ棹させよや 窮理の船に

佐々木さん。忘れません。いつまでも。

(昭和49年卒)

## 父と翔友会

佐々木 秀雄

父の葬儀の際には、多くの方々にご参列を賜り、小野先生には過分な弔辞を、また出棺のおりには皆様から校歌を頂くなど本当に有り難うございました。

「ご主人のお葬式は本当に温かいお葬式でしたわね。」母は、葬儀の後お会いした方々から、度々そのような声をかけて頂いたそうです。私自身も同様の思いです。

十数年来、東京に暮らしている私としては、父の交友の広がりをおの時初めて知った次第です。翔友会に係するエピソードを綴ってみます。

### ●ワープロ

切れた電球1つ替えられない父が、70を前にして突然ワープロを始めたのには驚かされました。

「どんな機械がよいのか」と問われたときは、どうせ無駄になるだろうけど、まあ良いかと考えて、「画面の大きい奴」などと適当に答えておきました。使わないなら頂いてしまおうと、手ぐすねを引いて待っていたのですが、一向に根を上げる気配がありません。それどころか、操作方法を電話で聞いてくる始末。たまに出張で大阪の実家に立ち寄った時に見た、2階の自分の部屋に籠って雨垂れのようなスピードで人差し指1本でキーを叩く姿には、思わず苦笑したものです。使用目的の殆どは、もちろん翔友会関係です。機械音痴の老人がワープロを覚えなくなる程に、翔友会の仕事が生き甲斐であったのでしょうか。

### ●霧が峰

死去する1ヶ月程前、蓼科へ家族旅行に出かけました。ピーナスラインをドライブしていたところ、父が霧が峰のグライダー練習場を見たいと言いました。学生さんの試合の応援にでも来てるのかと聞けば、そういう訳ではないという。「昔ち

よつとな、ムニヤムニヤ……」。霧が峰に近づくと、山の頂上付近にアスファルトを敷いただけの簡素な発着場が目に入りました。やけに入ってみたいと言うので、周囲を1周して探したのですが、車で入れる入口には生憎とチェーンと鍵がかかっていました。近くのレストランに入り、昼食をとったのですが、さっさと食べ終わった父は、諦めきれずに皆をレストランに残して寒い中1人で歩き出しました。「あんな遠いところまで歩く気かねえ」「その内引き返してくるんじゃないの」「あれでほんとに病気かしら」などと我々は、やや呆れていました。

その時は何故にそんなに行ってみみたいのか判らず、物好きなものだと思っていました。ところが葬儀のあと叔母(父の姉)が言うには、学生のころ霧が峰に時々練習に行っていたというではありませんか。それ程思い入れのある場所だと判っていれば、付き合いもしただろうに。というように、父は本当に自分の事を語らない人間でした。

そういえば、戻ってきた父は随分と満足気な顔をしていたものでした。

このように父は飛行機が大好きだったのですが、私は今になって漸くそのことを理解しているという有り様です。

#### ●終わりに一感謝に代えて一

突然の死に驚かれた方も多かったと存じます。晩年の父の病はかなり深刻な状態であり、何故こんなに健康そうな生活を過ごすことができるのかと、主治医の先生も不思議に思っていたようでした。病の発見後、予想を越えて長く生きる事ができたのは、まさに父が日々の生活に満足し、肉体の衰弱を越える心の充実を覚えていたからに違いありません。

人との交わりの中で過ごすのが、父の生き方でした。とりわけ翔友会の皆様とのお付き合いが、大きな位置を占めていたと確信しています。いわば、父の晩年は皆様に生かされていたようなもの、というのが私の心境です。

多少早すぎる死ではありましたが、今父に問えば「我が人生に悔いなし」と胸を張って答えることでしょう。

生前に頂いた皆様のご厚情には、相応しいお礼の言葉も見つかりません。本当に長い間お世話になり有り難うございました。

今後の益々の翔友会の発展と皆様のご健康を祈りつつ、感謝の言葉とさせていただきます。

